

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 初期漱石における「科学」の様相：「文学論ノート」をめぐって                                                                                                                                                                                     |
| Sub Title        |                                                                                                                                                                                                                   |
| Author           | 伊藤, 節子(Ito, Kiko)                                                                                                                                                                                                 |
| Publisher        | 慶應義塾大学国文学研究室                                                                                                                                                                                                      |
| Publication year | 2013                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田國文 No.57 (2013. 6) ,p.48(15)- 62(1)                                                                                                                                                                             |
| JaLC DOI         | 10.14991/002.20130600-0048                                                                                                                                                                                        |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20130600-0048">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20130600-0048</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 初期漱石における「科学」の様相

——「文学論ノート」をめぐって——

伊藤 節子

## Ⅰ.「文学論ノート」という資料

漱石文学における「科学」へのまなざしは、「文学」の「心理的」「社会的」説明を試みた『文学論』（明36・9—同38・6講義、同40・5大倉書店刊）はもとより、具体的題材として諸作品にもしばしば見出すことができる。物理学や遺伝学、また進化論といった、いわゆる自然科学としての「科学」と漱石との接点、関係性については、小山慶太<sup>(1)</sup>、小澤萬記<sup>(2)</sup>、久保忠夫<sup>(3)</sup>などの論稿に詳しい。他方、『文学論』に用いられたような、方法としての「科学」については、たとえば福井慎二<sup>(4)</sup>が比較研究的にその性質を明らかにしているものの、漱石における「科学」の本質に迫るものはなかったように思われる。『文学論』についていえば、平成24年に特集が組まれたように、再注目されつつあるものの、<sup>(5)</sup>ここでも漱石における「科学」の内実は十分解明されたとは言いがたい。それには渡辺正雄<sup>(6)</sup>が「科学」を「西洋というきわめて特定の思想文化圏において、西洋的な思想、文化を基盤として特定のときに、特定の人々によって初めて作り出されたものである」と位置づけるように、近代、文明、西洋といった概念に、既に「科学」という意味合いが含有されているため、それだけを純粋に定義することが困難であるためかもしれない。本稿では、初期漱石の「科学」なるものに改めて焦点を当て、「文学」との関係性を明らかにしたい。

さて、『文学論』にはその構想案としての資料「文学論ノート」<sup>(7)</sup>（以下「ノート」と略す）の存在がある。明治34年秋冬頃に執筆が始まったと考えられているこの「ノート」の背景をまず確認する。

周知の通り、明治33年から35年にかけて英国留学した漱石は、同36年9月から38年6月まで東京帝国大学において「英文学概説」の講義を行う。受講生でもあった中川芳太郎がその内容を筆記したものに加筆修正が加えられ、明治40年に大倉書店から刊行されたものが『文学論』であり、留学当時の漱石の思想が極めて色濃く反映されている。その序文に「余は心理的に文学は如何なる必要あつて、此世に生まれ、発達し、退廃するかを極めんと誓へり。余は社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり」とあるように、「心理学」「社会学」の方面から、いわゆる科学的手法で「文学」の解明が試みられており、文学的内容の形式を「焦点的印象または

観念」Fと「これに附着する情緒」fによって成る（F+f）とし、この公式をもとに文学理論を展開する。序文には、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年」「英文学に欺かれたるが如き不安の念」といった西洋に対する個人的な嫌悪感が述べられている一方、『文学論』執筆以前、明治35年3月15日、中根重一に宛てた書簡には、極めて広い分野への関心が窺われる。

「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釈すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の変化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸元素を解剖し其聯合して発展する方向よりして文芸の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」る積りに候斯様な大き〔な〕事故哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも関係致候

草案の時点において『文学論』は「文芸」のみならず、世界観、人生観等を論じるために哲学、歴史、政治、心理学、生物学、進化論といったあらゆる学問領域が研究対象となっていた。その壮大な構想の詳細が断片的ながら記されたものが、英国留学中「蠅頭の細字」で書かれたこの「ノート」なのである。これが『文学論』の「ノート」であることは言うまでもないが、後の講演や諸作品に至るまで、作家活動全般の礎とも言うべき言説の集積であるといえる。冒頭に掲げられた「大要」は、そのことを如実に物語っている。

- (1) 世界ヲ如何ニ観ルベキ
- (2) 人生ト世界トノ関係如何。人生ハ世界ト関係ナキカ。関係アルカ。関係アラバ其関係如何
- (3) 世界ト人世トノ見解ヨリ人生ノ目的ヲ論ズ
- (4) 吾人人類ノ目的ハ皆同一ナルカ。人類ト他ノ動物トノ目的ハ皆同一ナルカ
- (5) 同一ナラバ衝突ヲ免レザルカ。衝突ヲ免レズンバ如何ナル状況ニ於テ又如何ナル時期ニ於テ如何ナル方法ヲ以テ此調和ヲハカルカ
- (6) 現在ノ世ハ此調和ヲ得ツ、アルカ
- (7) 調和ヲ得ズトスレバ吾人ノ目的ハ此調和ニ近ヅク為ニ其方向ニ進歩セザル可ラズ
- (8) 日本人民ハ人類ノ一國代表者トシテ此調和ニ近ヅク為ニ其方向ニ進歩セザル可ラズ
- (9) 其調和の方法如何。其進歩ノ方法如何。未来ノ調和ヲ得ン為ニ一時ノ不調和ヲ来スコトアルベキカ。之ヲ犠牲ニ供スベキカ
- (10) 此方法ヲ称シテ開化ト云ヒ其方向ヲ名ヅケテ進化ト云フ
- (11) 文芸トハ如何ナル者ゾ  
文芸ノ<sup>原</sup>基源  
〃〃ノ発達及其法則  
文芸ト時代トノ関係 etc

文芸ハ開化ニ如何ナル關係アルカ進化ニ如何ナル關係アルカ

- (12) 若シ此方法ト方向ニ牴触セバ全ク文芸ヲ廃スベシ
- (13) 若文芸ノ一部分ガ此ニ無關係ニテ一部分ガ有益ニ一部分ガ有害ナラバ第三ヲ除スベシ
- (14) 文芸ノ開化ヲ裨益スベキ程度範圍
- (15) 日本目下ノ状況ニ於テ日本ノ進路ヲ助クベキ文芸ハ如何ナル者ナラザル可ラザルカ。v. 西洋
- (16) 文芸家ノ資格及其決心

「大要」

「世界ヲ如何ニ觀ルベキ」という認識論的問いを起点として、何をなすべきかという倫理的、実践的問題意識が「調和」を究極的な目的として挙げられる。その実践の主体は「動物」を比較対象とした「人類」という最も大きな枠組みから、対西洋としての「日本人」、さらに「文芸家」というように段階性を持って示されている。「大要」のうち、「文芸」が問われるのは後半部分においてであり、「若シ此方法ト方向（開化と進化：筆者注）ニ牴触セバ全ク文芸ヲ廃スベシ」とまであるように、「開化」と「進化」を方法と方向にもつ「調和」が最たる目的なのであり、「文芸」はそれへの手段として焦点化されているに過ぎない。「ノート」にはこうした計画のもと、諸問題に関する極めて精緻な分析が窺えるにもかかわらず、『文学論』研究史上、ひいては漱石研究史上参照されることはわずかであった。ここでは従来への研究への新たな可能性としても、この「ノート」に注目してみたい。また、『文学論』は言うまでもないが、「ノート」の言説は主に『文芸の哲学的基礎』（明40・4・20講演、同40・5・4—6・4「東京朝日新聞」）、『創作家の態度』（明41・2・15講演、同41・3加筆、同41・4「ホトトギス」）（以下、『基礎』『態度』と略す）の二講演のノートとも言えるほど、講演中に漱石の世界観、人間観、文学観が垣間見えるため、以上のテキストをまたぐ形で「科学」の本質に迫ることとする。

このうち『文学論』は後の講演において、漱石自ら「失敗の亡骸」「畸形児」（『私の個人主義』大3）と称することもあり、理論の欠陥性が強調されることは少なくないが、矛盾点の指摘に留まり、その内実は十分に解明されたとは言いがたい。当初の目論見が「文学」に限られていたわけではなかったように、文学理論としての『文学論』は壮大な構想の部分に過ぎなかった。冒頭に挙げられる文学的内容の形式が、「吾人が日常経験する印象及び観念」として「日常経験」に発していることは、そのことを顕著に示すといえよう。このように、現実世界の世界観、認識の問題から論の展開することは『基礎』『態度』も同様である。書かれたものとしての「文学」に留まらない領域を背景にもつこと、いわば「調和」を指向するまなざしは、常に現実世界に向けられていることを念頭に置きながら読み進めなければならない。

## Ⅱ.『文学論』から『作家の態度』へ

対象とするテキストの流れから確認したい。『文学論』と『基礎』『態度』の二講演は、発表時期が近く、同様に「意識」概念に基づいて論じられることから、その差異の比較が中心的な研究となってきた。一連の流れを追う前に、『基礎』『態度』を概観しておく。

『基礎』は明治40年4月20日、東京美術学校で行った講演に加筆し、同年5月4日から6月4日まで「東京朝日新聞」に連載される。私という存在が、私と私以外の物、すなわち「物」「我」の対立であること、我々の生命は意識の連続であり、その生命は、理想を基準とし、どのような意識をどういう順序に連続させるかという選択作用を有することを土台とし、その理想が文芸においては「真」「善」「美」「壮」の四種であり、理想と技巧との合致が文芸の極致であるとされる。

『態度』は明治41年2月15日、東京青年会館における講演であり、それに加筆されたものが同年4月「ホトギス」に発表される。存在は意識の流れであり、「我」と「非我」という区分、いわば「観方」を中心とし、「我」を主とする立場を主観的態度、「非我」を主とする立場を客観的態度とする。古来文学はどちらか一方によって成立するものではないが、日本では情操文学が過半であり、客観的態度を欠いていた。両者は平衡を保って発展する必要がある、ということがその主意である。

この二講演と『文学論』とを比較し、島田厚は『文学論』の「暗示法によつて支配される意識の推移は競走を経、その競走は自然かつ必要であり、もし競走暗示のないときは習慣的・約束的に意識の内容と順序を繰り返すに過ぎないとする意識理論が、『基礎』『態度』にあつては、意識に「ある程度の自由」「幾分かの余裕」を認めるものとなっていることを指摘する。このことは漱石の「思想上の革命的变化」であり、その内実とはウィリアム・ジェームズの「意識の選択作用」の影響を多分に含む、「決定論」の呪縛を振り払ったものであったとする。この指摘後、大野淳一<sup>(9)</sup>は必ずしも『文学論』における意識理論が「決定論」と言い尽くせるわけではないと述べる。というのも、天才<sup>(10)</sup>についての言及に、「習慣的・約束的」の推移に埋没しない意識の存在も主張されているためである。

さらに、すでに意識化されていることからの競走に、「自由意志」や「選択」の介入があり得ないとは言い切れないこと、単に機械的な意識の推移を繰り返しているに過ぎない人間には「観念の連想」「文芸上の手段」を駆使することはできないことを挙げ、これらの「決定論」からはみだした部分が、後の二講演につながるとする。

また、重松泰雄<sup>(12)</sup>は『基礎』と『態度』の差異を、意識の選択作用が「明確な能動的選択——自由意志と『理想』強調の立場」から「複雑な煮えきらぬ受動的選択」の立場への変化であると指摘する。このことは、『野分』(明39・12)および『虞美人草』(明

40・6—8）と『坑夫』（明40・12—41・1）との差でもあり、その間にはジェームズの『宗教的経験の諸相——人間性の研究——』（*The varieties of religious experience, a study in human nature*, 1902）（以下、『宗教的経験の諸相』と略す）に見られる「潜在意識的潜伏」（subsoncsious incubation）の影響があるとする。このことはジェームズの『心理学原理』（*The principles of psychology*, 1890）から同著者の、『宗教的経験の諸相』への転換、つまり自由な選択作用を認めつつも「目ざめているときの意識」下に限定されていたものから、「潜在意識的潜伏」へ視野の開かれたことによってもたらされたことを示す。

これらを受けて、『基礎』における「物」「我」の対立が『態度』で「我」「非我」に改められていること、作者の「意識の連続」と読者のそれとの合一の仕方が、『基礎』から『態度』へ移り変わる際、不明瞭であることなどを挙げ、『文学論』から『態度』に至る過程をロイド・モーガン等の意識理論から、ジェームズの「意識の選択」説への転換の過程ととらえる小倉脩三<sup>(13)</sup>の論がある。

さらに近年の論考で塚本利明<sup>(14)</sup>は、『文学論』の時点でジェームズの言が引かれていることから、執筆当時には少なくとも『心理学原理』には目を通しており、「決定論」的とはいえないとする。というのも、ジェームズの『心理学原理』は暗示法と同時に、意識の選択性、いわゆる自由も容認する立場であるためである。

細かい指摘として、影響関係の時期の推定に、重松は漱石の『宗教的経験の諸相』への書き込み時期を、「間違いなく『哲学的基礎』以後」とであるとする一方、漱石とジェームズの著書との出会い、すなわち『心理学原理』と『宗教的経験の諸相』の購入時期を、佐々木崇<sup>(15)</sup>は、英国から帰国してすぐの時期、明治35年から翌年頃と想定している。

ここまでおよそ50年間の『文学論』と二講演に関する主な研究に「ノート」はほとんど参照されてこなかったのだが、「ノート」にはこれらの議論を端的に解決する記述が残されている。まず、最も明瞭なものとして、先に述べたジェームズの著書との出会い、書き込みの推定時期についていえば、「ノート」にはすでに著作名が記されている<sup>(16)</sup>。したがって購入は留学中であることは疑い得ず、さらに読後と考えられるメモの残されていることから、書き込みは帰国以前になされたものであるといえよう。このことから、重松の指摘したように『基礎』から『態度』、ひいては『野分』『虞美人草』から『坑夫』への変化を『宗教的経験の諸相』の影響とすることはできない。

また、「文学」の議論がしばしば一般論へ拡張していくことから、佐々木は文学者である漱石がなぜ哲学的考察を必要としたかという問題に、ジェームズの心理学的言説への共鳴を見出し、それが一つの手がかりであったとするが、これもまた「ノート」の「大要」において、「文学」が「調和」を目的とした壮大な問題意識の中では二義的であったように、そもそもの目的が「世界」「人生」といったいわゆる哲学的問いにあったことを考慮すれば当然のありようである。

さらに、具体的な論点に踏み込めば、先行論文における議論の中心は意識の選択作用に自由があるか否か、つまり決定論的か否かにあったといえるが、「ノート」において「決定論」の否定は明白なものである。

○道徳ヲ論ズル者ノ中ニ determinist ナル者アリ曰ク吾人ノ行為ハ character & circumstance ノ antecedents ノ為ニ determine セラル皆 causation ノ law ノ為ニ govern セラルルノ故ニ choice ノ freedom ヲ有セズモシ此説ヲ真トスレバ吾人ノナシタル善行悪為共ニ責任ナキ者ナリ従ツテ凡テノ賞罰ハ応報（其人ニ対スル）ニアラズシテ其人ノ未来ノ行為ニ対スル奨励モシクハ懲戒ノ具ニ過ギズ、即チ過去ニ対スルノ酬ニアラズシテ未来ニ対スルノ策ニ過ギズ

「Genius」

行為が先行する条件、つまり自然法則による因果性に支配されているという「決定論」を否定し、そうした因果律からはみ出る人間の自由の可能性を認める。『文学論』の意識の選択作用の箇所<sup>(17)</sup>においては「自由」という概念をもって説明されなかったものの、当初から確実に選択の「自由」は容認されているのである。

ここまで見てきたように、『文学論』および二講演に表れる言説のぶれは、その間に触れたジェームズやモーガン等の思想の影響はむしろあるにしろ、遡る土台としての「ノート」にすでに述べられていることは多く、根本的な相違はないと考える。したがって、『文学論』および『基礎』『態度』を、漱石の思想における一つの大きな枠組みとして扱うこととする。

### Ⅲ．〈知〉としての「科学」

初期漱石における「科学」の様相を明らかにするにあたって、漱石自身がその概念をどのようにとらえていたのかを確認しておく必要がある。

日本人には芸術的精神はありあまる程あつた様ですが、科学的精神は之と反比例して大いに欠乏して居りました。（中略）科学が泰西から飛んで参りました。今日迄約四十年立つたので、大分趣が變つて参りました。科学の訓練を経た眼で人を見たり、自分を見たりする事が大分流行つて参りました。然し此精神が一般に行き渡つて居ない為め、且つはあまり大切でない為め今日迄あまり進歩して居りません。

『態度』

明治の西洋文明を象徴する鉄道や汽船、産業の促進に伴う具体的な技術としての目に見える「科学」のみならず、批判的精神としての「科学」、すなわち人間の知性そのものが「泰西から飛んで」きたもの、すなわち西洋の産物であるという解釈が前提となっている。文明を支える「科学」も、文化というものがその土地に根付くものであることと同様に、局地的なものであると言わざるを得ない。この「科学的精神」の進歩し難い状況は、「約四十年」という時間を経ている、その誕生の場の特殊性に拠るところは

大きく、「一般に行き渡って居ない」のである。このことは、知性の担い手が非「一般」、すなわち知識人というごく限られた人々であることをも示唆しよう。

また、「近代科学」の誕生が西洋という場であったといえども、時代の推移によってその性格を異にすることは言うまでもない。「科学が泰西から飛んで」きて「今日迄約四十年」と言われるように、明治という時代の特殊性に対する認識も、ここに垣間見ることができる。

ガリレオやニュートンの時代、すなわち科学の方法やその進むべき方向の決定する17世紀を第一次科学革命、科学という専門的な職業の成立、科学がもはや揺るぐことのない知的伝統となった19世紀を、第二次科学革命と呼ぶことがしばしばあるが、漱石の「科学」という概念に明治という時間的枠組みが含まれていたように、19世紀という時代背景をもつものとして限定的に理解されていたことがわかる。

こうして「科学」という概念は、時間的、空間的な枠組をもってとらえられている他、『文学論』では「文学」との比較において、「解剖的」、「秩序の配列」、「観察・実験」によることなどが主な性質として挙げられている。また、『基礎』において「知を働かす人は、物の関係を明める人で俗に之を哲学者もしくは科学者と云ひます」とも語られるように、「科学」が解剖や分析を旨とする〈知〉であることはもはや疑い得ない。

さて、『文学論』の基本的公式である（F + f）は「意識なる語より出立」している。先にも述べたように、『文学論』から『態度』は、一貫して「意識」概念を中心としているのである。このことは「ノート」に遡って確認することができる。

All modes of existence ヲ総括シ得レバ conservation of energy ト co-ex-tensive & co-ordinate ナル conservation of consciousness (infra ヲ含ム)

「The View of the World」

すべての存在のあり様、いわば生きとし生けるものの総括は「conservation of energy」（エネルギーの保存）という生理学的側面から定義づけられる一方、「conservation of consciousness」（意識の保存）としても認識される。「ノート」に示されるこうした「意識」の位置づけは、『基礎』に「只明らかに存在して居るのは意識であります。さうして此意識の連続を称して俗に命と云ふのであります」、「私と称して居るのは客観的に世の中に実在しているものではなくして、只意識の連続して行くものに便宜上私と云ふ名を与へたのであります」と、また『態度』に「我と云ふものは常に動いてゐるもので（意識の流が）さうして続いてゐるもの」というかたちで表れている。

このように「意識」はあらゆるものに先立つもの、いわゆる第一原因として位置づけられているが、「ノート」の「大要」が「世界ヲ如何ニ観ルベキ」に始まるように、認識の仕方、いわば〈知〉たる「科学」は、その根底にあると言ってよい。「意識」と〈知〉とはどのような位置づけにあるのだろうか。

吾ガ云フ所ノ者ハ幻象界ノコトナリ 幻象以外ニ渡レバ不可許空想ニ帰ス根蒂ナキ

迷想ニ帰ス。幻象以内トハ意識ヲ離レズトノコト智ヲ離レズ情ヲ離レズ又意志ヲ離レズトノコトナリ（中略）若シ理解ニアラズ情解ニアラズ有ニアラズ無ニアラズト云ハバ是幻象以外ノコトナリ幻象以外ノコトハ智ヲ用フル学問ノ上ニ於テ説クベキニアラズ

「超脱生死, Religion & State, Religion ノ起源, Unknowable, Religion」

「智ヲ離レズ情ヲ離レズ又意志ヲ離レズ」とあるように、知情意として示される精神は現象界という領域性をもつ。よって「科学」としての〈知〉はこの現象界において働く。しかし、ここで現象界内という条件を設けていることは、先の「consciousness (infra ヲ含ム)」(意識の下を含む意識)にも既に明らかなことではあるが、現象外の領域のあることをも指し示すこととなるだろう。「学問ノ上ニ於テ」論ずるに値しないとしながらも、「理解」「情解」を超えた不可知なる領域を暗に認めていることは否定できまい。いずれにせよ、〈知〉は現象界という枠組みをもつ。その具体的な働きを見てゆきたい。

人間の凡テノ智識ハ sensation, experience ニ始マツテ intelligence (association ニテ action ヲ control ス) ヨリ perception ニ移リ conception ニ至ル Data ヲ云ヘバ悉ク sense impression ナリ observation 又ハ experiment ニテ得タル impression ヲ analyse シ abstract シ又 synthesis シ generalize シ classify シテ law トナス是 science ナリ

「超脱生死, Religion & State, Religion ノ起源, Unknowable, Religion」

〈知〉が「印象」としての経験を「analyse」（分析）、「abstract」（抽象化）、「synthesis」（統合）、「generalize」（一般化）、「classify」（分類）、「law」（法則）とすることが「science」（科学）と言われることから、「科学」が物質的な技術や道具、学問の意味に限定されないことはここにも明白である。

では、このように定義付けられる「科学」すなわち人間の精神作用としての〈知〉とはどのような構造を呈示するのであろうか。「ノート」に示された〈知〉の過程は『態度』にも同様に以下のような過程を辿る。

先づ吾人の経験で尤も単純なものは sensation であります。（中略）あるものを二度見てははゝああれだなと合点するのを recognition と申します。二度以上度々見て、矢つ張りあれだなと承知するのを cognition と申します。もし一つのものを度々見る代りに同種類の甲乙を度々見た上で、矢張り同種類の丙に逢つた時、是は此種類の代表者もしくは其一つであると認めるのは conception の力であります。

『態度』

「Data ヲ云ヘバ悉ク sense impression」と記されたように、与えられた情報は「impression」（印象）として、感覚器官をその入り口としており、知的認識は精神的なものでありながら、根源的には視覚、聴覚といった五感、すなわち身体的経験によっ

ていることがわかる。逆に言えば、認識が概念化されるにしたがって、すなわち抽象度を増すほど身体性とは離れてゆくのである。「ノート」での「perception」という一つの段階は、『態度』においてより細分化された「recognition」「cognition」となっているものの、認識過程が「sensation」（感覚）から「conception」（概念）に至るという流れは一貫している。以上をまとめると、〈知〉は「sensation」→「perception (recognition)」→「perception (cognition)」→「conception」という段階を経るものであり、その流れを端的に言えば、「impression」（印象）から「conception」（概念）への過程ということができる。

#### Ⅳ．〈知〉の主体——「我」の様相

大まかな流れとして、感覚を出発点として漸次抽象化してゆく認識の過程を確認した。〈知〉が「観方」、いわば事象をとらえるものである以上、その主体は自ずと問われることとなる。「世界観」の形成、いわば〈知〉の実現として「impression」（印象）から「conception」（概念）へ至る構造は、その主体なるものに焦点をあてるとき、どのような様相を呈するのか。

世界は観様で色々に見られる。極端に云へば人々個々別々の世界を持つてみると云つても差支ない。同時に其世界のある部分は誰が見ても一樣である。（中略）世が進むに従つて、複雑な世界と複雑な世界観が出来て、さうして一方では此複雑なものが統一される区域も広がつて来るのであります。

我々内界の経験は現在を去れば去る程、恰も他人の内界の経験であるかの如き態度で観察出来る様に思はれます。（中略）我のうちに非我と同様の趣で取扱はれる部分が出て参ります。

#### 『態度』

我々は個々別々の世界観を有しているが、このうちにも「誰が見ても一樣」、いわば「非我」なる領域が存在し、それは「他人の内界であるかの如き態度」で眺めることによる。このことは、主客の問題に他ならない。具体例のひとつに「酒の資格を鑑別する為めの」番頭の酒の飲み方と「酒の味を旨がつて、口舌の満足を得る」晩酌との比較がある。番頭の飲み方は「我から非我へ移る態度」「誰が見ても一樣の部分」「非我が主、我が賓」「属性的の経験」「主知主義」である一方、「酒の味が自己の幸不幸」になる晩酌は、「非我から我へ移る態度」「我が主、非我が賓」「感受的」「主感主義」と位置づけられる。これらはすなわち「客観」、「主観」の謂いであるが、飲酒自体は「一の全き経験」に他ならず、「いづれへ片付けなければならない様に人間が出来上がつて居ると思ふのは中庸を失くした議論」であるように、あくまで便宜上分けられたものである。

「非我」という立場が「人々個々別々の世界」の「ある部分」、また「客観」が「主観のうちの一般に共通な部分」（『客観描写と印象描写』明43・2・1・『東京朝日新

聞])と位置づけられることは、「我」「主観」なるものが「非我」「客観」という相対あって始めて見出されたものであることを示唆する。西欧科学の流入以前の人間に科学精神が欠乏していたため「文学に於いても、非我の事相を無我無心に観察する能力は全く発達して居らなかつた」(『態度』)と言われるように、「非我」を「観察する能力」である「客観」とは「近代科学」としての〈知〉そのものの性質であり、「我」、「主観」という主体のありようもまた、前者の立場の確立によって改めて発見された領域なのである。

このことは先述した「impression」(印象)と「conception」(概念)の関係性と重なり合う。いわば、「conception」(概念)による「impression」(印象)の発見という構図を呈示する。「我」「主観」という領域を見出したものが、「近代科学」としての「非我」「客観」という立場である以上、この「科学」が発見の装置として機能していることはいうまでもない。認識過程に示された「conception」(概念)とは「sense impression」(感覚印象)の漸次抽象化、法則化されたもの、まさに「科学」として位置づけられていた。

さらに、認識主体である自我が、自己懷疑によって再帰的に根拠付けられた結果としてではなく、「非我」との関係性の中に見出されてゆくその過程は、観念論的発想との類似を思わせる。殊に、ヘーゲルとの関係については、漱石の蔵書に『精神現象学』の英訳、研究書があること、また『三四郎』での言及があることなどから、具体的な接点、関係性の指摘<sup>(19)</sup>があり、少なからず共通点を見出すことができるが、「ノート」の段階から「unknowable ナル者ハ assume シ得ベキカ」(不可知なるものを仮定することはできるか)という問いは、無意味なものとして斥けられている。

(1) 此 unknowable ナル者ハ experience シタル者ナシ

(2)           〃           〃           experience シ得ル見込ミナシ。(後略)

(3) 之ヲ assume シタレバトテ何ノ利益モナシ只 intellectual ノ欠乏ヨリ之ヲ assume シタル為メ万事ヲ解釈シ得ルト信ズル輩アラバ其人ノ随意ナリ(後略)

(4) 是 assumption ヨリ生ズル弊ハ経験ニ属スベキ物ヲモ経験セズシテ独断スルニアリ(後略)

「超脱生死, Religion & State, Religion ノ起源, Unknowable, Religion」

「ノート」における観念論的命題へのこうした態度は「余は余に関し、社会に関し、人間に関して、未だ嘗て彼等一派(カント其他の唱道した一派の学問：筆者注)の純正哲学者の云々する絶対とか、無限とかいふ意義を使用する必要を認めた事がない」(「草平氏の論文に就いて」『東京朝日新聞』明43・3・18)という言説や、最晩年ではあるが、「神秘の雲のうちに隠れて弁証の稲妻を双手に弄する人」(「点頭録」『東京朝日新聞』大5・1・1—21)というヘーゲルの形容にも垣間見ることができ、終生一貫して信奉するに足るものではなかったといえる。

それに反し、経験論に対しては「ロツクが経験の二字に飽迄重きを置いて心は何でも経験から観念を得るのであるから、経験を捨てては丸で議論が出来ぬと迄論じたのは、空漠なる哲学を堅固なる基礎の上に建立した者で、此實際的な着実的な態度が大いに注意する価値のある事と思ふ。」（「一八世紀に於ける英国の哲学」『文学評論』明38・9—43・3講義、同42・3、春陽堂）と賞賛を与えている。これを受けて一義的に経験主義者と位置づけることは早急かつ安易にしろ、認識過程の入口に感覚を位置づけることや、抽象概念を扱う際に示される具体例の多様性などからも、経験を重んじる立場にあることは疑い得ない。「ノート」から『態度』に至るまで、幅広い西洋思想との接点はこの他にも数多く窺えるが、漱石自らもイズムを「吾人の知識欲を充たすための統一函」「頭で拵えた器」（「イズムの功過」『東京朝日新聞』明43・7・23）と語るように、それらに盲従する形での単純な思想受容でないことは明らかである。

## V. 「文学」と「科学」

「科学」の根源に対する問いは、精神作用すなわち〈知〉として、その主体のありようを浮かび上がらせた。こうした背景を孕む概念としての「科学」は「文学」との関係性においてどのようなありようを見せるのだろうか。

『基礎』『態度』ではいずれも「現代文芸」「現代精神」として「文学」における現代性が問題意識の中心となっている。周知の通り『基礎』において文芸の理想は①「感覚物其ものを目的物」として「美的情操」を喚起する「美的理想」、②感覚物を通じて知の働く「真に対する理想」、③情の働く「愛に対する理想及び道義に対する理想」「善の理想」、④意志の働く「莊嚴に対する理想」の四つに大別される。このうち「現代文芸の理想」は〈知〉を働かす「真」であるとするにもかかわらず、その最たる例に挙げるゾラやモーパッサンについては「病的の現象」「下品」と評している。

西洋の社会がかく腐敗して文芸の理想が真の一方に傾いたものとすれば、前後の考へもなく、すぐ夫を担いで、神戸や横浜から輸入するのは随分気の早い話であります。外国からペストの種を輸入して喜ぶ国民は古来多くあるまいと考へる。私がかう云ふとあまり極端な言語を弄する様であります、実際外国人の書いたものを見ると、私等には抽出法がうまく行はれないために不快を感ずる事が屢あるのだから仕方ありません。

### 『基礎』

一見、掲げられた理想と矛盾するかのようでもあるが、四種の理想は「互に平等な権利を有して、相冒すべからざる標準」なのであり、ここに与えられる批判とは「真」の横行による、他の理想を壊しかねぬことへの警戒である。このことは同時に「近代科学」をもたらした「西洋」に対する批判であるともいえよう。〈知〉を働かし、「真」を理想とすること、いわば手法として「科学」を「文学」に取り入れること自体には積極

的であっても、その方法、叙述内容の選択は、単純な「西洋」の受容であってはならないのである。

一方、『態度』では「作家の世界観の纏つてあらはれた著作其物を比較して、其特性を総合した上で、之に一種の名称（自然派とか浪漫派とか）を与へて、夫から年代を追つて其発展を迹付ける」文芸の「歴史的研究」批判に始まる。この方法で文芸を明らかにすることが「偶然に出て来た人間の作の爲めに何主義と云ふ名を冠して、作其物を是非此主義を代表する様に取り扱つた結果、妥当を欠くにも拘はらず之を飽く迄も取り崩し難き whole と見做す弊」を招き、それが「一本調子に発達する科学の影響」と言われることは、「歴史的研究」がいわゆる方法としての「科学」であることを意味しよう。また「純粹なる歴史的研究とは云へない」が「作物の形式と題目とに因つて分つ」ことも「与へられた作物を与へられたなりに取り扱ふ丈で、其特性を概括するにとゞまつて仕舞ひやすい」とあることは、共通して「科学」の形式化への批判であるといつてよい。

これに対し、漱石は「心理現象から」叙述の形式を「作家の態度」として「主知（客観）の態度に三つ、主感（主観）の態度に三つ」計六に分類し、主客の関係性から『基礎』にも語られた「真」「善」「美」「壮」について言及する。ここに見られる分類も一つの形式化に他ならないが、「歴史的研究」としての「科学」と差異化されたものとして呈示された「態度」とは「観方」に該当するものであり、叙述はこれらに厳密にあてはまるわけではなく、「両極端（客観と主観：筆者注）の間をうろついて居る、ととらえるものである。

「我」の解剖に際して見出された立場、「主観」「客観」があくまで「便宜」、つまり本来「一つの全き経験」であると語られたことは、「文学」にも敷衍して意味づけられている。「科学」による主義や方法の類型化はひとつの手段ではありえても、普遍的に「文学」を規定するものとはならないのである。

『基礎』『態度』には共通して「文学」が「西洋」「近代科学」と差異化されたものとして、その現状と方向性が示された。総じて、「文学」を定位するための言説であつたともいえるが、必ずしも「文学」の厳密な定義づけやあり方が示されるわけではなく、むしろ規範化への超克がうたわれた。このことは「近代科学」、それが目的とする唯一の「真」、さらにそれをもたらした「西洋」に対する独自性の表れであるが、逆説的にいえば、それは「西洋」「近代科学」としての〈知〉を通じてしか問うことができなかったといえる。

『文学論』における「文学」の記号的説明、語法の類型化などは、いわゆる方法としての「科学」に他ならない。その試みは漱石の「科学」への信頼を垣間見せもするが、第三編第一章「文学的 F と科学的 F との比較一汎」で「科学」はそれ自体相対化の対象とされる。「解剖的」「破壊的」である「科学」の役割が「秩序的配置」であるのに対

し、「文学」が「物の本性の発揮」のために「解剖を方便として綜合を目的とす」ことは「科学」があくまで「方便」に過ぎず、「目的」とはなりえないことを物語る。また、「〈時〉を含有」し「〈時〉と共に推移する」「幻惑」としての「文学」のありようは、「〈時〉なる觀念を脱却すること」のできない「科学」を包括するものである。「方便」としての「科学」に対する「綜合」という「目的」をもつ「文学」の位置づけは、『基礎』『態度』に見られるような形式化、觀念化としての「科学」批判の先駆けといえるだろう。

さらに、「ノート」の言説に遡れば、「文芸ハ或点ニ於テ science ト conflict ス、即チ true ヲ棄テ、他ノ資格ヲ求ム」とあり、「文芸」が科学的な「true」（真）としてではない価値をもつことが示唆される。このことは『文学論』における「文学上の真」を想起させる。

文芸上の真と科学上の真と其間に微妙の関係あるは勿論なれど、文芸の作家は文芸上の真を其第一義とすべく、場合によりては此文芸上の真に達し得んが為に甘んじて科学上の真を犠牲とするも付加なきに近し。

「文学」と「科学」とはその本性を異にする。「ノート」で言うところの「他ノ資格」とは、この「文芸上の真」の発想の萌芽に他ならない。

『文学論』から『態度』まで、それ自体相対化された「科学」の内実が、解剖や抽象、主義や方法の類型化、いわば概念として可視化することであったことは「ノート」に見た〈知〉たる「科学」の構造に位置づけられた「conception」（概念）とまさに重なる。このことは同時に認識の出発点として位置づけられた「impression」（印象）なるものを照らし出そう。「主観」「客観」と「impression」（印象）「conception」（概念）との重なりに、前者が後者を内包する構図、あるいは後者による前者の発見という関係性が見出されたように、「文学」は「科学」によって見出されつつも、より全体的なものとして位置づけられる。いいかえれば、これまで「我」「主観」「impression」（印象）として語られてきたものは、「文学」の領域として、非「科学」たる〈知〉を指し示すのである。

＊

〈知〉たる「科学」は「観方」として、ある世界観を呈示するが、精神の三大作用が「知情意」として「ノート」に示されていたように、精神作用には〈知〉の他に〈情〉〈意〉という要素が残されており、〈知〉の問題はそれらとも併せて考えられなければならない。いずれにせよ、漱石は創作活動以前に「調和」という目的のもと、世界、人生、文学に対する極めて壮大な構想を有している。「ノート」をはじめ、漱石の思想的側面は改めて問われるべきであろう。

- (1) 小山慶太「漱石の科学観」(『国文学 解釈と教材の研究』平13・1)
- (2) 小澤萬記「漱石と進化論」(『高知大学学術研究報告 (人文科学)』平12・12)
- (3) 久保忠夫「漱石と自然科学」(三好行雄ほか編『講座夏目漱石』昭57・4)
- (4) 福井慎二「漱石『文学論』の科学性についての予備的考察」(『国文論叢』平6・9)
- (5) 「特集＝漱石『文学論』をひらく」(『文学』平24・5-6)
- (6) 渡辺正雄「文化としての近代科学 歴史的学際的視点から」(平13・1)
- (7) 村岡勇編『漱石資料——文学論ノート』(昭51・5)
- (8) 主なものの概略を以下に示す。
  - ・「いかに最新の心理学を以て近代的な装いをこらしても、結局、古い修辞学的な限界から脱し得ていない」塚本利明「『文学論』の比較文学的研究——その発想法について——」(『日本文学』昭42・5)
  - ・モルガン理論を用いながらFとfが「意識過程に従って区別されていないという矛盾」がある。福井慎二「(F + f) の科学の前提——漱石『文学論』への私註——」(『国文学研究ノート』平8・11)
  - ・「『文学論』を多面的、不整合にしている要因」として「[A] 科学的概念の導入と応用＝心理学と文学の齟齬」「[B] 語の多義的使用＝曖昧性」「[C] 分類の不統一＝構成的不統一」「[D] 情緒(f) 自体の性質＝不確定性」を挙げる。鈴木敦子「f < 情緒> をF < 認識> する漱石」(『比較文学研究』平12・8)
  - ・「文学論」への「無関心と低評価」を「時代の雰囲気」とし、「心理学の方面から文学の活動を論じるのは」「とりたて新味を感じるようなものではなかった」と斬新さの欠如を指摘。藤井淑禎「『文学論』再読」(『解釈と鑑賞』平13・3)
- (9) 島田厚「漱石の思想」(『文学』昭35・11)
- (10) 大野淳一「漱石の文学理論について」(『国語と国文学』昭50・6)
- (11) 「常人の意識は常人を支配する源因によりてFよりF'にF''よりF'''に推移して窮極する所なし。天才の意識は常人を支配する源因によらずしてFよりAに、AよりBに、推移して窮極する所なし。」(『文学論』第五編第一章「一代における三種の集合的F」)
- (12) 重松泰雄「『文学論』から『文芸の哲学的基礎』『創作家の態度』へ——『ウィリアム・ジェイムズ』との関連において——」(内田道雄・久保田芳太郎編『作品論夏目漱石』昭51・9)
- (13) 小倉脩三「文芸の哲学的基礎、創作家の態度」(『国文学 解釈と教材の研究』平6・1)
- (14) 塚本利明「『文学論』から『文芸の哲学的基礎』へ——ロイド・モーガン『比較心理学』との関わりを中心に (I)」(『専修人文論集』平23・10)
- (15) 佐々木崇「夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ——『文芸の哲学的基礎』を中心に——」(『京都大学文学部哲学研究室紀要』平22・3)
- (16) 「James Rel. Ex. [The Varieties of Religious Experience, London 1902] 388. 普通ニ所謂 Rational consciousness ハ consciousness ノ一種ニ過ギズ」(『The View of the World』)、「James Rel. Ex. p. 416」(『超脱生死, Religion & State, Religion ノ起源, Unknowable, Religion』)
- (17) 「(一) 吾人意識の推移は暗示法に因って支配せらる。(二) 吾人意識の推移は普通の場合に於て数多の⑥の競走を経。(ある時はFとF'の両者間にも競走あるべし)。(三) 此競走は自然なり。又必要なり、此競争的暗示なき時は(四) 吾人は習慣的に又約束的に意識の内容と順序を繰り返すに過ぎず。(五) 推移は順次にして急劇ならざるを便宜とす。(反動は表面上急劇にして実は順次なるものなり)。(六) 推移の急劇なる場合は前後両状態の間にある対照あるを可とす。(対照以外に之と同等なる又は同等以上の刺激あるときは此限りにあらず)。」(第五編第二章

「意識推移の原則」)

(18) 中山茂『近世日本の科学思想』(平 5・9)

(19) 山本亮介「夏目漱石における論理の問題——ヘーゲル哲学への開口部」(『津田塾大学紀要』平 19・3)